

『Dies irae, dies illa
solvet saeculum in favilla:
teste David cum Sibylla
Quantus tremor est futurus,
quando iudex est venturus,
cuncta stricte discussurus...』

火焰かえんに包まれた神殿に、「怒りの日」が鳴り響く。

その旋律の中には女と、彼女に刃を突き立てる男、そして彼に必死にすがり付く少女が——ヴィジョンはそこで唐突に変わって——折り重なった二つの死体と血の海が映し出される。その背後には、胸へいケンクロイツに鉤まなこ十字が刻印された悪魔が群れを成し、その邪悪で卑しい眼まなこを光らせている。その飢えた獣どもがその死肉を貪り、臓物を引きずり出し、血を舐め啜すすっている間、男は泣き叫びながら神殿の神像に取りすがることしかできないかった——略奪者によって破壊された四肢と、灼熱しやくねつに晒さらされ朽ち果てた肌をもつ石膏細工に。

やがて屍しかばねが喰らいつくされると、悪魔は牙から血を滴らせながら男に一匹、また一匹と飛びかかった。喉笛を食い千切られ、叫ぶことさえままならぬ彼の身体を、牙が、爪が、そして彼らの底知れぬ悪意が容赦なく襲う。千切れ飛ぶ手足。

吹き出る血しぶき。散乱する内臓。肉を切り裂かれる苦痛と我が身を弄ばされる汚辱おとろに悶もたえながら、男は息絶えた。

飛び散った血潮と細切れになった肉片にまみれた三つの骸むらを、鎮魂歌は冷たく抱擁する。紅蓮ぐれんの炎に包まれた神殿は、地を裂く轟音ごうおんをたてて彼らの上に崩れ落ちた。まるで三人の墓標のように。なおもその終末の響きは鳴り止まない——

『怒りの日、その日には

ダヴィデとシヴィラの預言の通り

世界が灰燼かいじんに帰す

審判者が現れて

全てが厳しく裁かれるとき

その恐怖にどれほど震え上がることだろうか』

アブラム・マラッドはベッドから飛び起きた。あまりの恐怖にシートも掛け布団も汗でびしょ濡れだ。激しい動悸どうきに苦しまされつつ、何とか意識を現実げんじつに引き戻す。かれこれ、十年近くこの悪夢に悩まされ続けている。そう、忘れもしない

あの日から、彼は毎晩肉を喰われ、生き血を吸われ、八つ裂きにされているのだ。現実ではないにしろ、その苦痛たるやどれほどであろう！ ああ、今晚もあの忌まわしき者どもに惨殺されねばならぬのかと思うと、一日で最も安らげる時間が一日で最も恐るべき時間に変貌してしまう。今となっては、今日もまたあの夜が来るのだなど夕刻の沈みゆく太陽にさえ言い知れぬ恐ろしさと不安を感じるほどだ。

だが、ただの幻影にいつまでも怯えているわけにはいかない。自分の手でそれをかき消すのだ。彼はベッドから立ち上がり、手早く着替えて部屋をあとにした。

彼は「ある場所」を目指して歩き始めた。朽ち果てた住宅街、薄暗いスラムや汚らしいバラックを踏破した先にそれはある。道すがら金銭を乞う哀願や、薬物の幻覚に喘ぎ苦しむうめき声が聞こえる。捨て犬が互いを舐めあうように注射器を使いまわす人々、力なくその場にうずくまりすすり泣く人々、狂ったように片言の祈りを虚空に捧げる人々……。

この国がこれほどまで荒廃してしまったのにはわけがある。六年前、この国に社会主義政権が誕生した。しかし党による計画経済は失敗、深刻な不況に陥った。政府はこの失策を認めず、自らの面子を保つため、また党の専政によって私腹を

肥やす「共産貴族」と呼ばれる政権上層部の保身のため、計画経済を強行し続けた。その結果、民衆の間に不満が広がり、反政府勢力による活動が活発化。この社会主義政権をよく思わない西側陣営はこれを好機として武器・資金で彼らを援助、ついに政権は崩壊し、新たに軍事政権が誕生したのが二年前だ。前政権があまりに腐敗していただけに人々の期待は大きかったが、所詮は軍人、まともな政治運営などできるはずがなかった。あつたのは前政権高官の大量粛清と軍人同士の政争だけ、民衆の希望は見事に裏切られた……。

この国の受難劇に思いを馳せながら歩いていると、目的地に到着した。前政権時代の工場跡地だ。足を踏み入れると、中の暗がりから声がした。

「どなたですか」

『ジェイコブ・レオノヴィッチ』だ。そちらは？」

『パフレヴィー』でございます

よし、まずは接触成功だ。互いの名を確認し部外者ではないことを確かめると、奥から小柄で浅黒い中東風の男が現れた。手には大きなジュラルミンケースを持っている。

「ミスター・レオノヴィッチ、お待ちしております。改めて私、パフレヴィーと申します。この度はご指名の上商品をお買い上げ頂き、誠にありがとうございます。これから

も一層のご愛顧を……」

「御託はいいから早く例のモノを見せてくれ」

「……はい、分かりました。こちらになります」

パフレヴィーと名乗る男は手にしたジュラルミンケースを開けた。

「ナガン M1895 はいやいます」

中には一丁の回転式拳銃が入っていた。

「この銃はなかなか手に入らぬ貴重品ですね。もともと若いソ連将校のものでしたのですが、先の大戦でのスターリングラードで彼はナチの凶弾に倒れたそうです……。で、この銃はそのときに鹵獲されたものです。戦闘経験もろくにないのに激戦の最前線に送り出され、その無限の可能性を戦場で潰され、軍人の誇りたる武器を強奪された彼の無念、いかほどでしょうねえ？」

口を歪め、不敵な笑みを漏らしながら話す商人の姿はなかなか不気味だ。

「やめてくれ、気味が悪い」と返答し、銃を見る。一見ただの拳銃にしか見えないが……。木製グリップについた黒ずんだシミはともすると、例のソ連将校が戦死したときについたものかもしれない。こちらを覗く銃口はまるで生贄を待ち受ける怪物の口のように得体の知れぬ威圧感と禍々しさを感じ

させる。銃身についた多くの傷は激戦の記憶をありありと物語る。戦場で拳銃を主にした戦闘はあり得ないから、こんな傷のつき方は不自然だ。最期まで主力装備の弾が尽きるまで戦い抜いた末に力尽きたのか、あるいはまともな装備を与えられず人海戦術の犠牲になったのか……。なるほど、確かにこれは怨念にまみれた怪銃なのかもしれない。これ以上この銃について詮索すると「知らなくていいこと」まで分かっしまいそうな気がする……。

「……装弾数が七発なのだな」と話をはぐらかす。

「おやおや。あまりにその銃を凝視しておられたもんですから、その思念に取り入られてしまったのかとひやひやしていましたよ。そうですね、回転式にしては珍しく七発装弾できます。まあ自動式拳銃でもよかったです、弾詰まりが起る恐れがあります。おたくのような暗殺稼業で飯食つてるような方には、弾詰まりほど恐ろしいアクセントはないでしょう？ なにせ目標抹殺の機会は一期一会、悟られたら二度と訪れぬかもしれません。当然返り討ちにされる可能性も高い。ですから、より安全性の高い回転式のほうがよいのです。その中でも、装弾数が比較的多い当銃が最適と言えましょう。それから……」

「弾詰まりを考慮してくれたことはありがたいが。私はプロのエージェントだ、薄汚い殺し屋じゃない」

アブラムがパフレヴィーの話を遮る。そう、彼は自国の誇りのため、民族とその神の栄光のために奔走するエージェンツト、決して汚れ仕事ではない。まして、殺し屋稼業で食いつないでいるなどという無礼な言葉は看過できぬ。

「おっと失礼しました、ミスター・レオノヴィッチ。まあ、血に汚れたテロリストだろうと、高潔な戦士だろうと私は構いませんがね——私は武器商人、世間で言う『死の商人』なのです。私にとつちや金さえあれば誰でも正義の徒ですよ」

「そういう問題じゃない。こちらの名誉の問題だ」アブラムの感情的な返答に「さようでございますか」とパフレヴィーは軽くあしらった。

「そして、最も重要なのはですね……。これをご覧ください」そう言つてケースの中から赤茶けた円筒状の棒を取り出した。

「ナガン専用の消音器サレッサです。その構造上、一般的に回転式拳銃に消音器は無意味とされますが、これは例外です。特殊設計により、十分な消音効果が期待できます」

なるほど、この古ぼけた旧式銃をよこした理由はこれか。

この男、人となりはともかく、武器商人としての手腕は確かなようだ。アブラムは思わずうむ、とうなった。

「札を言おう。あなたのおかげで今回の任務、首尾よく遂行できそうだ」

「お褒めにあずかり恐縮でございます。しかし私は商人、感謝の意は金の額ではからせて頂くとというのが古来よりの習わしでございます」

「もちろん。ただし、三日後だ。大金を持ち歩いていると、この国の治安上、面倒なトラブルに遭う恐れがあるからな。こちらのエージェンツトから資金を受け取つてからにする。三日後、ここで契約額を払わせてもらおう」

そう告げ、彼はジュラルミンケースを掲げて廃工場をあとにした。

すっかり午後になつてしまつた。この国の夏は厳しすぎる。うだるような暑さに耐えながら帰りの道を歩いていると、アブラムはあることに気が付いた。行きるときと比べ、圧倒的に浮浪者が少ないのである。恐らく、午後の殺人的な暑さを避けるための避暑地のようなものもあるのだろう。まあ、ゴミ捨て場から拾つてきた扇風機なり送風機なりを盗電して動かしているだけだろうが。恐らく場所はここから見える廃ホテルの一室と思われる。今残っているのはそこに入り損ねた奴らか……。浮浪者にも貴賤関係ヒエラルキがあるわけだ。最下層の最下層とはこれいかに、と目をやってみる。しかし、すぐに

その行動を後悔することになった。そこにいたのは、末期病状で動けなくなっている老人、薬物の禁断症状でのたうち回る若者、涎よだれを垂らしながら虚空を見つめる廃人たち。もはや彼らは長くは生きられないだろう。ある意味、死の訪れが救済の訪れとも言うべきか。とかく、とても直視できる光景ではなかった、あまりに悲惨すぎて居たたまれない。午前まして、午後のスラム街はこの世の地獄だった。すぐにでもここから立ち去りたくて歩みを早めると、何かにつまずいた。ふと足元を見てみると、その原因が分かった。それは小さな少女の足であった。

「ごめんなさい、おじちゃん……」

見れば彼女の瞳は無垢むくなる澄んだ輝きを放ち、華奢まじしやで小さな四肢はどうしようもなくこちらの庇護ひご欲を掻き立てる。身なりこそみすばらしいが、その麗しさ、清らかさは、まさに業火に降り立った天の使い——

「こちらこそ失礼した、お嬢さん」

そう言つてアブラムはそそくさと立ち去った。彼女を見てみると、胸が締め付けられるような苦しみに襲われる。その一つは彼女を助けられない無力感、罪悪感である。しかし、彼の一人娘の面影を思い出させるといふことが何より心に突き刺さる。

在りし日の娘、エリサベトはまさにこの少女のようだった。

現世に生まれ落ちた神の使いだった。天から授けられた宝玉だった。なのに、突然エリサベトは彼の腕から取り上げられてしまった。たったの七年で神のもとへ還かえつてしまった。そうだ、忘れもしないあの日、彼女はナチに殺された。今もはつきりと思い出される。ぼっかりと胸に空いた傷から血を吹き出しながら倒れ伏す彼女の姿を。途切れ途切れに助けを乞う彼女の言葉を。大粒の涙を瞳いっばいにためた彼女の表情を。彼は決してその光景を——忘れられないのではなく——忘れない。それをきっぱり忘れてしまつて穏やかに過ごすこともできた。そうすればエージェントとして自らの身を危険にさらすこともない。この世の終わりのようなあの悪夢からも解放されるだろう。しかし、彼はそれを拒絶した。軍籍に入ると同時にイスラエル諜報特務庁サに入つて武器を取り、ナチハントになることを選んだのだ。どのような理由があろうと、彼は容赦しない。彼の脳裏に鮮明に刻まれた悲劇の光景、それが彼から「慈悲」の二文字を奪い去る。そうして一人残らずナチに裁きを下した先に、真に平穩なる余生があると彼は確信しているのだ。

今回の標的はナチスの元少佐だ。ドイツ国内の反ナチ分子の摘発、ユダヤ人狩りはもちろん、絶滅収容所におけるホロコーストにも加担した筋金入りの悪党である。二週間前、そ

のナチ残党がここ南米某国のB州に潜伏しているという情報が当局に入った。そうして、一週間前、アブラムと彼のサポートエージェントが派遣されたというわけである。その許される犯罪者の名は――

夕闇かかるスラム街をひとり、背高の男が歩いている。

彼、ヘルゲ・シュヴェルツマンはかつてナチス親衛隊の少佐だった。多くの反ナチ分子を処刑し、多くのユダヤ人を収容所送りにした。特に、ナチス統治時代のフランスにおける治安管理では高い評価を受けた。各種犯罪の厳しい取り締まりはもちろん、厳しい文書検閲、苛烈極まるレジスタンス弾圧によって、彼に対する親衛隊上層部からの信頼は非常に高いものだった。将来、中将クラスへの昇進は確実と目されていたほどだ。そう、彼はナチスの英雄シュヴェルツマン少佐であった。

だが、今は違う。今の彼は忌まわしき戦争犯罪者シュヴェルツマンである。先の大戦でドイツが敗北すると同時に、彼の出世街道を邁進する輝かしき生活は、ネズミのように追手の包圍網をかいくぐる惨めな逃亡生活に変貌した。無論連合

国による追及も厳しいが、それ以上に恐るべきはイスラエルの諜報組織モサドだ。他国の諜報組織に比して、モサドは遙かに――それこそ怨念じみた執念で――執拗に追い詰めてくる。事実、彼は戦後、フランスからイタリア、マルタ、果ては中米インド諸島に至るまで名を変え姿を変えて逃げ延びたのだ。しかし、どの地でも追及の不穏な影が落ちていた。ともに逃亡した元党員は一人、また一人と拘束されていった。いちど奴らに捕まれば終わりだ。捕まったが最後、法廷に引きずり込まれ犬のように吊るされる。戦犯や政治犯の類は暴行、拷問で辱められた上でむごたらしく殺される、というのは自身の経験からよく分かつていた。

追及の手から逃げおおせるには、二つのことが肝要である。一つは、当たり前だが一般人に対しては徹底的に素性を隠すこと。そして、自身の逃亡を援助してくれる人々を見つけること、これが二つ目だ。元ナチのような重罪人を庇う者がいるとはにわかには信じがたいが、現実にいるのだ。例えば、マフィアなどの反社会勢力。彼らはナチ残党の軍事知識・戦闘経験を重宝する。また、保守を掲げる団体。彼らは共産主義勢力に対抗するため、ナチ党員を歓迎してくれる。そして、前者と後者の目的を同時に要求する組織。驚くべきことに、この「組織」とは一国の政府や機関であることがほとんどだ。現実には、三か月後、ヘルゲはこの南米某国新政府の軍事顧問

として迎え入れられることになっている。この政府は、旧社会主義政権の残党を排除し、自らの軍事力を強化するために、彼のナチズム的政治手法と軍事経験を必要としているのだ。いちど政府お抱えの役人になれば、ほぼ逃亡は成功したと言つてよい。国からの手厚い保護によってモサドどもに発見されることはほとんどないし、例え見つかったとしても捕まることはあり得ない。仮にも一国の官吏を拘束、拉致などしようものならイスラエルは主権を侵したことになる。そうならば国際的な非難を受けることは免れない。いくら相手が憎むべきナチスだとしても、たった一人の人間のために国益を大きく損なうようなことはしないだろう。つまり、ナチハンターがどれだけ血眼になって彼を捜索しようと全くの徒労なのであり、たとえ発見したとしても歯ざしりしながら帰国するのが関の山なのである。

歩くこと二十分、ようやく目的地へ着いた。そこはスラムの一角、ある浮浪者が住み着いているバラックだ。

「おう旦那、お待ちしていましたぜ」

バラックの奥から体格のよい男が出てきた。彼はこの一帯のスラムの首領となる人物だ。

「ああ。では、例のものを頼む」

ヘルゲの要求に応じて、小屋の中から様々なものが出てき

た。それは一週間分ほどのパン、魚の缶詰、干し肉、ナッツ類、水などである。

「おお、今回もご苦労だった。全部でいくらだったんだ？」

「そうですな……だいたい二五〇ペソといったところでしょうかね」

……恐らく本当は百八〇ペソ程度だろう。まあ、よい。今となつては彼ら浮浪者たちがヘルゲの生命線である。彼らの機嫌を損ねるのは得策ではない。

「そうか。では、これが追加報酬だ」

浮浪者に食糧を買いに行かせ、対価として代金の一・五倍ほどの金を支払う。これが、彼が逃亡生活の中で身に付けた生き残る術である。彼も、はじめのころは他の党员と同じように、民間人に偽装して町に出かけていた。何か月かその手口を使っていたが、捕まった者はいなかった。だから、党员たちは皆何不自由しない新生活を送っていた。だが、その考えは甘かったようだ……。ナチハンターはこちらの予想以上にこちらを監視していた。彼らはナチ残党だと気付いてもその場では捕えない。住所、身体的特徴、交友関係、生活パターン、何から何まで洗い出して初めて行動に出るのである。逃亡開始から六か月後、党员のおよそ三分の一が捕えられた。彼は間一髪で逃げおおせたわけだが、仲間が「ヘルゲ、助け

てくれ！」「見逃してくれ、俺には妻子が……！」と口々に叫ぶ光景は今でも忘れられない。

首領の男に三七五ペソを渡し、家路につこうとするヘルゲ。ふと、彼の眼に一人の少女が映った。彼女は力なく壁にもたれかかり、路地に足を放り出してうつむいている。今までは気付かなかったし、気にも留めなかったが……新入りなのだろうか。

「おい、この子は……」

彼は思わず首領に訊いた。

「ああ、そのガキですか……。最近、そうですね、二週間くらい前にここに転がり込んできやがった小娘ですよ。なんでも親に先立たれたんだそうで。おおかた前の軍隊連中のクデーターにでも巻き込まれたんでしょうな」

なるほど、なかなか難儀な子どもであるな、せっかくだから顔を拝見、と屈んで顔を覗き込んでみる。すると、彼女は眼を開けていないことが分かった。彼女の顔を見ながら、首領に尋ねる。

「この子、起きていないが大丈夫か？ 寝ているようには見えないが」

「はあ、ここ最近の暑さにやられたんでしようねえ。何日前からそうやってくたばったままですよ。うちには医者も薬

もないし、あとは死ぬのを待つばかりってとこですかね、ええ」

面倒そうに応じる首領と反対に、真剣な眼差しでヘルゲは彼女を見つめる。この顔立ち、どこかで見たことがあるような……。しかし路地裏の暗がりの中のこと、はっきりとは見えない。はて、どうしたものか。思案に暮れていると、ふと、懐中電灯を持っていることを思い出した。いつも真っ暗になる前に用を済ませるので使う機会は少ないが、念のために拳銃と弾薬、それに懐中電灯は常に持ち歩いていたのだ。電灯で照らしつつ、改めて彼女の顔を見てみる。

「これは……！」

この瞬間、彼の疑念は失^うせた。見よ、彼女の顔立ちは——彼の人生で最も大切^ただったひと、そして彼を戦争へと駆り立てたひと——そのひとに似ていた、いや、それそのものだった。

「首領」

「どうしました、旦那？」

「この子、しばらく預らせてもらえないか？」

首領の男は、要領を得ないような困惑の表情を浮かべた。

「は？ こんな死にかけのガキですか？」

「そうだ。ダメか？ ここで死が訪れるのを待つよりも……」

しかし表情と言葉から彼に他意がないことが分かると、首領は彼の要望をあつさりと認めた。

「はいはい、分かりました。何の目的があるか知りませんがいいですよ。煮るなり焼くなりお好きに」

アブラムは、再びあの工場跡に向かっていた。昨晩もあの悪夢を見た。例外もあるが、たいていナチに関わることをする日がかかるたびにあの夢が蘇ってくる気がする。いわゆるトラウマというものだろうか。この断続的に、言葉を変えれば不意に襲い掛かってくるこの夢は、彼にとって常に恐怖であり続けた。もちろん、夢の中で行われる惨劇に対する恐ろしさもある。ただ、それとは別に、何か得体の知れない、未知の恐怖を感じるのだ。その正体が何であるのか、彼には分からない。それが何なのか、少し手を伸ばせば掴めるような気がするのだが——他方、それを知ってしまったら、その先には果てなき絶望が待ち構えているような気がするのだ。太古の昔にバンドラが禁忌の箱を開けてしまったように……。

ともかく、ナチを殲滅すればこんなことで悩む必要もなくなる。そう、苦悩の根源は自分で絶つのだ。それが自分を苦

しみの鉄鎖から解き放つことになり、そして今は亡き最愛なる娘への手向けとなるう。

工場跡へ着くと、前と同じように奥から呼びかける声があった。

「おはようございます、ミスター・レオノヴィッチ」

「パフレヴィーだな。代金を払いにきた」

「おお、それはそれは。ありがとうございます」

暗がりの中から浅黒い小男が出てきた。彼が今回モサド上層部が指定した武器商人パフレヴィーである。

「いかがですか、ナガン MISS の使い心地は。前持ち主のソ連将校の靈魂はあなたに味方しましたかな？」

アブラムはこの男がどうも苦手だ。この気色の悪い笑い声、妙に粘着質な話し方、一片の好感も湧かない陰気さ。裏の世界の者に特有な、非人間的な雰囲気と一寸の隙も与えない狡猾さ。とにかく、彼のことあまり好きでないのだ。

そうは言っても、相手は政府が指名した名うでの武器商人、作戦の遂行には彼の協力が必要である。アブラムは彼に答えてやることにした。

「いや、まだ使っていない。抹消対象は目標のみだからな。だが、あんたから買い取ったあの銃、確かに役立ちそうだ。例の将校の魂もこちらに味方してくれると信じてるさ」

それを聞くと、パフレヴィーは困ったような顔で大袈裟に肩をすくめて見せた。

「おや、それはいけませんねえ……。新しい銃を使うときは試射してから、というのが鉄則てつそくでございましょう？ それにいざ使うときにうまく作動しない、などとなったらこちらの責任になってしまいます」

「しかしなあ……この辺りには射撃場など見当たらないのだが。あんた、近くにいいところ知らないか？」

彼の質問に、にやりと笑いながら武器商人は答えた。

「分かりませんか。あのスラムでうごめいている連中ですよ。銃の性能を試すのは生身ソフトターゲットの人間が一番でしょう？」

「……正気か？ 彼らは人間だぞ？」

「失礼しました。ただの冗談ですよ」

この世界に生きる人々のなかには常人では理解不可能な価値観を持つ者が少なからずいるが、どうやらこの武器商人もそうらしい。口ぶりからして、ただの冗談には聞こえない。恐らく過去にも同じ提案をし——客によっては実行した者もいたのだろう。

「しかしながらですね……彼らがまともな人間には見えませんよ、私からしたら。彼らはひとかけらの信念も希望もなく、泥水を啜り塵ちりを舐めて腹を満たし、その現実を麻薬による束の間の悦楽で誤魔化しつつ生きながらえている。先ほどあな

たは『彼らは人間だ』と言っていました。果たしてそうでしょうか」

そしていやらしくにやりと笑ってこう言った。

「あなたが息の根を止めようとしているナチの犬ころ——彼のほうがよほど人間らしいと思われませんがね」

その言葉を聞いた瞬間、アブラムは頭の血管が一本切れたような感覚に襲われた。

「……それ以上言うと貴様のドタマをぶち抜いて試し撃ちにさせてもらうぞ」

気が付くと目の前の男に掴みかかっていた。それでも、パフレヴィーは表情一つ変えずに彼を愚弄する。

「おおこわい、こわい。まるで私怨しえんに駆られた人殺しのような眼をしていますね……。私のところにはそういう連中が頻りに来るからよく分かりますよ」

「黙れ！ 貴様、死にたいのか……！」

「はて、あなたは何か大事なことを忘れてるようだ。私はあなたのとこのお偉方のご指名を受けて武器をお売りしているのですよ。その私があなたに殺されたりしようものならすぐに彼らの知るところになりましょう。そうなればあなたはもうエージェントではいられなくなる——場合によっては始末される側になるかもしれませんよ？ まして、あなたは以前下手を踏んだ前科者の身……今回の任務、円滑に遂行しな

「ければいけないのでは？」

「アブラムははつと驚いた。なぜこの男がそこまで知っているのだ……。」

「貴様、なぜそれを」

「ええ、あなたのこととは何でも知っていますよ、モサドから聞いています。イスラエル関与の痕跡を残さず元ナチス党員を暗殺する任務を帯びていること。その任務はあなたが過去に犯した失敗によるものであること。そして、二度目の失敗は決して許されないこと……。」

「全てこの男の言う通りだ。アブラムには重大な前科がある。前任務で、あるナチ残党を東アジア某国で拘束、当国法廷に送った。その悪しきファシストは絶滅収容所で殺戮を行っていた悪魔であった。彼は、被告はあらゆる罪を暴かれ、当然死刑になるものだと思っていた。しかし、現実には証拠不十分で死刑を免れ、起訴さえされなかった。」

「彼は憤慨した。自分は何のために奔走していたのか。こんな現実が許されてなるものか。天は正義に与するものではないのか。そうだ、ならば自分が鉄槌を下し正義を行うべきだろう。彼は単身、銃を手にナチ残党を追い続けた。釈放されすっきり油断した奴の居場所を突き止めるなど容易なこと

だった。それは拘束時と同じ東アジア某国にあるとすぐに判明した。そして、追跡しているうちに、あの無罪釈放には何らかの圧力が関与していることも掴んだ。そうして、あと一息で黒幕の正体を暴けるところまで来たときに、突如として本国からの帰国命令が下る。いかんすべきか、このままでは黒幕を暴けぬばかりか、ナチに正義の裁きを下すという当初の目的さえ達成できぬ。切羽詰まったアブラムは奴の居住地を襲撃、射殺した。しかしそのときの彼はつくづく運が悪かった。たまたま巡回していた地元警察に現行犯逮捕されてしまったのだ。

二週間後、結局彼は釈放されたのだが、帰国後すぐにモサド長官に呼び出された。そこで伝えられたのは、大雑把に言えば彼が無事帰国できたのはイスラエルと当国の何日にも及ぶ交渉の末のことであったこと、今回の件が明るみになるようなことがあればモサド、ひいてはイスラエルの威信に関わるといふこと、そして彼をイスラエル陸軍及びモサドから除隊するということだった。それから、長官は彼に告げた。

「本来なら君のしたことは軍法会議ものだ……。しかし、これまでの功績と、君のナチ殲滅に対する熱意に免じてそれだけは止めようと思う」

「ここからが本題だ、と長官は続けた。」

「そこで、君には新たな作戦に従事してもらおう。今から、

君はイスラエル軍人でもなければモサド諜報員でもなくなる。ただの一般人として、イスラエル関与の証拠を残さずこの『ヘルゲ・シュヴェルツマン』という元ナチス親衛隊少佐を抹殺せよ。いいか、一切の痕跡を残さずに、だ。本国からの支援は資金援助のみを目的としたサポートエージェント一人の派遣、それと外部の武器商人の仲介だけだ。住居、生活必需品、食糧、その他任務に必要なものは全て現地確保せよ。なお、作戦失敗、あるいはイスラエル関与が発覚する恐れが濃厚になった場合は口封じとして……分かっているな。

当作戦は、太古の昔にユダヤ人を救った偉大なる王にあやかり『キュロス作戦』と名付ける。英^{キエロス二世}雄として帰還し名譽を回復するか、それとも異邦人の国で野垂れ死ぬかは——君次第だ」

そうして、『キュロス作戦』を遂行するべく、彼はユダヤ系ロシア人ジェイコブ・レオノヴィッチとしてここ南米某国に潜入したのだった。

「……間違いありませんね、ミスター・レオノヴィッチ——
もといアブラム・マラッド元イスラエル陸軍中尉」

パフレヴィーの胸倉を掴んでいた手が自然と離れた。

「……その通りだ。すまない、こちらが感情的になってしまっ

た。今のことはなかったことにしてくれ……」

アブラムはすっかり我に返っていた。そうだ、自分は何をやっているのだ。こんな下らない口論^{くわん}のときでナチを根絶やしにするという大義を、自分の名譽を失つてなるものか。

「……本題に戻ろう。これが契約通りの代金だ、受け取ってくれ」

「……あれ、ここはどこ？」

「おお、起きたのか」

ヘルゲは目を覚ました少女に呼びかけた。彼女が家についたときは、体力の消耗^{しょうちゆう}が激しかったのかぐったりしていたが、よかった。塩を少し溶かした水を飲ませたり、氷で体を冷やしたりしたのが功を奏したのだろう。

「道端で君が倒れているのを見つけてね。勝手ながら手当てさせてもらったよ」

「そうなの……。ありがと、おじちゃん」

あの路地裏で見つけたときも思ったが……ああ、なんとそっくりなんだろう、幼き日のエリーゼに！ その麗しい姿、穢^{けが}れなき愛らしい表情は彼女そのものだ。その碧い眼^{あおめ}をぱっち

り開けてたどたどしく話す姿など、彼女があの日々の姿のまま、目の前に蘇よみがえってきたようだ。二十年近くも追い求めた面影が今まさにここに……！ そう、永遠の翼をはためかせ、天からの祝福を受けながら降り立ったのだ！

「あの、おじちゃん……？ おじちゃん外人さんね？ おじちゃんはどういう人なの？」

感動と恍惚こうこつに浸っている彼を少女は不思議そうに見つめて尋ねた。

「ああ、すまない、私はヘル……いや、ピーター・ベレーンズだ。わけあってここにきた外国人だよ」

「そうなんだ、ピーターおじちゃんね。私はエリサ。エリサ・ローペスよ。」

エリサ。名前までそっくりではないか。やはりこれは定められた運命なのか……！ ヘルゲは高ぶる感情を悟られないよう冷静を装って、敢あえてこう訊いてみた。

「そうか。エリサ、君のご両親はどこかな？ 無事君も回復したようだし、送ってあげよう」

「え、うん、それはね……」

「どうした？」

「エリサには家族なんていないの……。お父さんも、お母さんもエリサにはいないの」

やはり孤児のようだ。嗚咽おえつしながらエリサはぼつぼつと語り出した。

彼女によれば、もともと父親は前社会主義政権の高官だったようだ。もつとも、彼女は父親を見たことはないらしい。

政府高官として相当な激務をこなしていたのだろう。それでも当時は豪華な衣食住が当たり前、それはそれは幸せで何不自由ない生活を弟とともに送っていた。だがそんな日常は、突然崩された。彼女が五歳のとき、軍部によるクーデターが行われたのだ。

彼女は母親と弟とともに間一髪逃げ出せたが、父親は捕まった。彼女はその後の顛末てんまつを知らないが、恐らく、まねごとの裁判にかけられた後、「人民の敵」などと罵ののりながら広場で公開処刑されたのだろう。政変にはつきものの光景だ。こういうわけで、彼女はついに、永久に父親の姿を見られなくなってしまうたそうである。

逃亡から六か月後、弟が栄養失調で死んだ。逃亡生活では栄養あるものどころか、食糧を確保すること自体難しい。ヘルゲも、子どもとともに逃げ出すも同じく栄養失調で死なせてしまったナチス党員を知っている。彼女と母親は大いに悲しんだ。母親など、腐くっていく息子の遺体を一週間以上も抱いていたようだ。

そして、今度は母親が民兵に殺された。民衆の前政権に対

する恨みは根深かったというわけだ。彼らは母子ともども殺害するつもりだったそうだが、母親の必死の抵抗のおかげで何とか逃げ出せたらしい。母親の死後、彼女は各地のスラムやバラック街を転々としていた。幸か不幸か、一人で行動していれば、ただのみなしごだと思われたため殺されることはなかった。そして、二週間前、あのスラム街に住み始めたという。

「だからね、治つてもエリサ帰るところなんてないの。んなら、あのままみんなのいるお空の国に行けたらよかったのかなあ……」

そう言う彼女の瞳は悲愴感ひせうに満ちていて、子どもらしからぬ諦めあきらの混じった儂さを浮かべていた。

「……ごめんなさい。ピーターおじちゃんにはとつても感謝しているわ。エリサのお話聞いてくれてありがとう。じゃあ、もう行くね」

彼女はそう言って背を向けた。

「待て。治つたばかりなんだから、しばらくここでおとなしくしていたほうがいい」

「え、いいの？ おじちゃんに迷惑かかるんじゃないかしら」

「いいんだよ。もう夜だし、寝なさい」

「……ありがとう、ピーターおじちゃん」

彼女は、眼いっぱい涙を浮かべながら感謝した。これまでの長きに渡る逃亡生活とスラムでの生活、そのなかではほとんどヘルゲ、もといピーターおじさんのような人間はいなかっただろう。他人の優しさに触れることなどなかったのだろう。そう考えながら、ヘルゲも眠りに就いた。

今作戦の目標、ヘルゲ・シュヴェルツマンの追跡を開始してから早くも二か月以上が経とうとしている。にも関わらず、全くその足掛かりさえ掴めない。

これまでのナチ狩りは、これに比べれば遥かに容易だった。これまでは、必ずと言っていいほどナチ残党を背後から支援する人々がいた。命をかけて逃亡するナチどもと違って、そういう連中は彼らを利用することしか考えていなかったため、すぐに尻尾を掴むことができる。その正体が暴けさえすれば、もうナチ狩りは成功したも同じだ。その連中の動向を調べれば、おのずとナチ残党の居場所も分かる。なのに、今回ばかりはうまくいかない。どれだけ調査しようとも、誰がバックについているのか全く割り出せない。また、単独潜伏の可能性も考慮し、彼が利用するであろうB州内のあらゆる日用品

店、食料品店、飲食店などを調べ上げたが、それらしき人物を見たという情報は全く入手できなかった。まさに八方塞りだ……。

頭の中を激しく駆け巡る焦燥感と、息の詰まるような暑さがアブラムの背立ちを加速させる。なぜ、今回に限ってここまで難航するのだ……。

もしかすると、奴はもうB州にいないのではあるまいか。あるいは、この国にすら居らず、今頃は全く別の国で自分の過去など忘れて、のうのうと暮らしているのではあるまいか。そして自分は、存在するはずのない敵の幻影を延々と追いかける鬼ごっこに興じているだけではないか。そんな姿を奴が見たらどう思うだろう。きつと、あまりの滑稽さに腹を抱えて笑い出すに違いない。とめどなく溢れ出す悪しき想像にさいなまされていくうちに、彼は自己に対する失望感を感じ始める。何が正義だ、何が大義だ。自分の娘の仇さえ取れない腰抜けではないか！

ふと、彼は携帯していたナガン拳銃に目をやった。思えば、この銃の持ち主だったソ連将校もナチの犠牲者だった。名もなき将校よ、死に向かうとき、お前もこんな無念を抱いていたのだろうか。ナチに抵抗し最期は惨めに朽ちていくなんて自分と彼は似ているな、これも運命なのだろうかと彼は苦笑した。

「エリサ、食べ終わったかい？」

「うん、エリサ全部食べたよ！ 今日もご飯おいしかった！」

少女とふたり、ヘルゲは食卓を囲んでいた。この少女——エリサ・ローペスと一緒に暮らし始めてからはや二か月。彼女と出会う前、各地で逃亡生活を営んでいたときは、いつハインターに拘束されるか、いつ絞首台送りになるかと怯えながら過ごしていた。一日の終わりには、ああ今日も無事でいられたと安堵するともに、いつまでこんな生活が続くのだろうと深い不安に悩まされたものだ。だが、今は違う。エリサといるだけで、もう恐れるものなどない気がする。ヘルゲの空に垂れこめていた怯えの暗雲は消え失せ、頭上には希望の太陽が力強く輝いているように思える。そう、彼にとつて彼女はまさに救済の天使だ。

「毎日ありがとね、パパ！」

今、エリサはヘルゲのことを「パパ」と呼ぶ。彼女を助けた二週間ほどあとのある日、唐突に言い出したのだ、「ピーターおじちゃんのことパパって呼んでいいかしら？」と。さすがに最初は面食らった。しかし、彼女の父親はすでに処刑され

てしまい、母とも弟とも死に別れてしまったことをすぐに思
い出した。彼女は父親のような自身を守ってくれる存在を、
そして家族のような戻るべき居場所を求めているということ、
それは想像に難くなかった。か弱い孤児である彼女の人生を
守れるのは自分しかない。また、確かに彼女と暮らし始め
てからは部屋も一段と狭くなったし、生活も一層苦しくなっ
た。それにも関わらず、恐怖と怯えでよどんでいた彼の心は
広く澄み渡り、微塵も感じられなかった幸せの感触が確かに
分かるようになった。それほどまでに、エリサは彼の生活を
変えたのだ。それに、あと二か月すればこの国の政府高官に
なれる。もうすぐで、精神的にも、物質的にも満たされた生
活が約束される。これらのことを鑑み、彼女にとって、そし
て自分にとって最良の道は何か——そう考えたとき、ヘルゲ
に選択肢は一つしかなかった。つまり、望み通り彼女の父親
の代わりになって、自分も異郷の地で新しい人生を送ること
だった。

「ああ、それはうれしいよ、エリサ」

ああ、今、彼女と夕食をとっている、このなんでもない瞬
間が、最高にいとoshい。かつてゲツベルスやヘスといった
大物党员と同席した豪邸での晩餐会よりも、この犬小屋のよ
うな部屋での夕食のほうがずっと充実した時間を過ごせる。
あの贅を極め趣向を凝らした宴会料理よりも、この古い缶詰

としなびたパンのほうがよほど美味に感じる。これも全て、
エリサがいてこそその幸せ。神よ、他には何も私は望まない。
ただ一つ、もし祈りが届くのなら、願わくばこの瞬間が永遠
に続きますように……。

「ねえ、パパ」

ヘルゲははつと我に返った。どうやら幸福に浸るあまり、
彼女の声が入らなかつたようだ。

「ああ、少し考え事をしていてね。なんだい？」

「父親」に声が届いたことが分かると、彼女は眼を輝かせ
ながら笑顔でこう言った。

「こんな時間がずっと続くといいね、パパ！」

「怒りの日」が無限に響き渡る神殿の中、男が女を刺殺し、
少女が死に、また男も鉤十字が刻まれた魔物に殺される夢。
潜在意識の門をこじ開け、悪魔たちが彼らを蹂躪し、無残に
屠っていく。

（誰か、助けてくれ……！ 頼む、見逃してくれ……！）

助けを求めるべき者など誰もいないはずなのに、それでも
声にならぬ叫びを上げつつ、深紅に燃え盛る炎の中を這いず

りまわる。そうしていると、視界に崩れかかった神の像が見える。いや、ひどく醜く崩れているため、その像がもともとどんな姿をしていたかは分からないが、それにすがれば何とかなりそうな気がする。だから、神の像だと感じたのだ。そんな一縷の希望を抱きながらその像のもとに辿り着いた。しかし、その途端、どういっわけかその希望は絶望に変わった。心の中からこんな思いが湧き出してくる。

（なんで自分だけがこんな目に！）

（結局誰も救ってくれないじゃないか！）

（許さない……奴らもこいつも！）

そんな彼を悪魔たちは容赦なく追い詰める、まるで狩りを楽しんでいくかのように。最期には、半壊した神像にしがみつきながら泣き喚く獲物を引きちぎっていった。神殿が崩れ落ち、男と女、そして少女の墓が立つ。そして生命の静寂が訪れるとき、彼の悪夢もまた終わりを迎えた。

「夢だったか……！」

目を覚ましたアブラムの心臓は今にも破裂しそうなほど激しく脈打っている。激しい息切れとともにベッドから立ち上がり、ふらつきながら冷蔵庫へ向かう。やっとのことで辿り着き、水をコップに注いで一口飲む。すると体の中に入り

と冷たさが染み渡り、半濁の意識が、すうっと現実に戻されていく。時計に目をやると、針は二時を示している。曇天のせい、外の闇はいつにもまして深い。朝になるまではまだ時間がかかりそうだ。彼は再びベッドに腰掛け、この久方振りの悪夢について思索し始めた。

この夢——最後にあの武器商人パフレヴィーと会った日以来全く見ていなかったが——よくよく考えれば不可解な夢である。「男」の思考や苦痛はまるで我が身のように伝わってくるのに、自分自身はその光景を俯瞰して見ているのだ。つまり、この悪夢では、自分は主体的存在であり、同時に客体的存在ということなのか……？ あの「男」は自己でありながら自己でない……？

「男」が全くの他人だとするのなら、なぜあれほどまで鮮明に彼の感覚が自分の中に流れ入るのだろうか。それに、かつて現実で鉤十字の悪魔どもに蹂躪されたのは他でもない自分自身である。あの「男」は自分自身の投影の他に何である。他方、「男」が自分自身であるとしても矛盾が生じる。夢の冒頭で彼は女を刺殺するが、冗談じゃない。死に値するのはナチどもだけである。もしあの夢が現実ならむしろ女を庇って戦うだろう。それに、自分はこの「男」のように下劣な不信仰者ではない。決して偶像に取りすがったり、まして神に絶望したりはしない。偶像を忌み嫌い、神にひたすら服従す

るのが我らユダヤ教徒の信念だ。

明確に現実とリンクするのは、延々と流れ続けるモーツァルトの「怒りの日」と、少女の死である。「怒りの日」は、幼いころ「神様に背くといつかこうなるぞ」と両親から言い聞かされつつ聴かされた記憶がある。その恐怖が、今なお脳裏に焼き付いているのだろう。死んだ少女は、紛れもなく彼の愛娘エリサベトだろう。直感的であるが、これは間違いないと断言できる。しかし、その二つ以外の内容はどうも違和感があるのだ。暫しの間アブラムはこの悪夢について考えていたが、結局あの「男」とは一体誰なのか、そしてこの夢の真意が何であるのかは掴めずにいた。一体この違和感、現実との齟齬は何なのだろう。あと少し考えれば、その疑問は解決されるのだろうか……。もう少し、もう少し考えれば……。そのとき、今まで夜空を覆っていた雲が流れ、月がむき出しになった。その煌々とした光は、アブラムを青白く照らし出す。暫しとかが止まったような静けさの後、彼はこう呟いた。

「何を考えているんだ、俺は」

そうだ。夢ごときに、何を悩む必要があるか。ここどころ、任務が少し難航していたから、こんな不毛なことを考えてしまうのだ。だがアブラムよ、下らぬ思案に暮れる暇などお前にはないだろう？ 一人でも多くのナチを狩ること、

これがお前にできる最善の道だ。それだけが、傷つけられた我らが民族の誇りを回復し、そして亡き娘エリサベトの苦しみと和らげることになるのだ。さあ殺せ、屠れ、葬り去れ……！

「そうだ、殺すんだ、一人残らず、根絶やしに……」

彼は真つ青な顔で、何かに憑かれたかのように言葉を続けた。

夜の闇が降り立ち、古ぼけた裸電球の明かりだけが仄かに光っている。その中で、エリサは華奢な身体を横たえてまどろんでいる。その姿は、清流の河畔に咲く一輪の待雪草のようだ。ヘルゲはこの小さく可憐な花に寄り添いながら、その寝顔を眺めつつ物思いに沈んでいた。

記憶は幼き日々にかかのぼる。第一次世界大戦終結の年の三年前、炭鉱のある田舎町で鉱夫相手に商売する飯屋の次男として彼は生を受け、育てられた。兄弟や周りの少年たちと違って、彼は生まれつき病弱だった。そのため、厨房裏の物置のような部屋で朝から晩まで絵本を読んでいるか、古紙に落書きするかというのが幼少における彼のもっぱらの思い出

であった。

ある初夏の日の晩方。その日は、ほとんどの絵本を読み終えてしまい、かと言って描きたい落書きの題材もなく、暇を持て余していた。退屈に耐えかね、いつもの部屋から客が飲み食いしている店内へと足を運び、ふと店の客衆に目をやると、大勢の鉱夫に混じって一人だけ少女がいた。どういうわけか、彼はその少女のことが気になってしまった。なぜこんな大人ばかりのところに女の子が？ あの女の子は誰なんだろう？ 何ていう名前で、どんなところから来たんだろう？ もっとあの子のことを知りたい……。幼きヘルゲはこの未知の感情になす術なく、持ち合わせの内気さで話しかけることもできず、ただぼんやりと彼女を見ているしかなかった。

「あら、いつもは見えない子ね？ あなた、何ていうお名前なのかしら」

彼女の言葉で、彼は我に返った。気が付くと、彼女が目と鼻の先ほどの距離にいた。どうやら彼の視線に気付いて、彼女自身から近づいてきたようだ。彼女の大きくて人なつこそうな眼差しが彼の眼を見つめ返している。くらり、と彼女の瞳に吸い込まれそうな思いになりながら、僕はヘルゲ・シュヴェルツマン、とどもりつつかろうじて答えた。

「はじめましてヘルゲ、私はエリーゼ。エリーゼ・シュナイダーよ」

そして、自分は隣町に住んでいること、父親は鉱夫をしていること、今日は父親に連れられてここに食事してきたと、頼まれてもないのに自分のことを話し出すという幼い子どもに特有な習性をいかんなく発揮し、今度はこう聞いてきた。「あなたいつも何してるの？ 私はもう何回もこの町に来ていられるけれどあなたの顔を見たのは初めてよ」

お家で絵本を読んだりお絵描きしたりしていると答えると、彼女は心底驚いたようだった。よく退屈しないのね、お外のほうがずっと楽しいのに、と彼女は言った。

「ね、ヘルゲ。今度一緒にお外で遊びましょ、きつと楽しいわよ」

こう彼女は持ちかけてきた。身体の弱い彼にとって外は恐ろしいものだったのでためらう気持ちもあったが、彼女と友達になれる、仲良くなれるという思いもあった。悩んだ挙句、最後は彼女のことをもっと知りたいというあの感情に押されて、彼はその提案を受け入れた。

エリーゼと交わした約束の日から、ヘルゲの日々は変わった。彼は色んなことを知った。こじんまりとして埃臭い自分の部屋と違って、外の世界は見渡す限り広がっているということ。炭鉱しかないはずの町の大地には緑の木々が力強く根を下ろし、その傍らには清らかなせせらぎが流れていること。

灰色に濁っていると思ひ込んでいた頭上には、煙突の黒煙を吸い込んで淡い青色に還す天空が広がっていること……。全て彼女が教えてくれた。彼女と過ごした日々は、彼の心を鮮やかに色づかせた。そう、春を迎えた草木が一斉に芽吹き花咲くように。ラインカドナウが干上がりでもするんじゃないか、と呆れる周囲をよそに、毎日のように彼女と外へ繰り出した。爽やかな夏の風に吹かれて、あの不思議な感情とともに。

しかし、それが不変の真理であるかのように、破局のときはいつだって突然やってくるものだ。翌年五月の春の日、あの日は、エリーゼと冬が終わったらまた遊ぼうと秋に約束した日だった。寒さと寂しさに震えていた冬を越え、ヘルゲは胸躍らせながら出かけようとしていた。そんな心持ちで扉のノブに手をかけた彼に、血眼ちまなこになった母親が飛んできて言った。「今日は危ないから絶対に出るな」と。なんで、なんでと駄々をこねる彼に、母は尋常でない様子で外出を阻止した。しばらくの言い合いの後、ついに息子のほうが折れた。明日、エリーゼに謝らないとな、などと考えながら彼はその日を過ごした。でも、彼と彼女に「明日」などなかった。翌日、彼は母親の世間話を聞いてしまったのだ。

「……ランデさんも気の毒にねえ」
「そうよ、まだ若いってのにねえ……」

「そうそう、シュナイダーさんとも残念だったわね……。あの小さい娘さんもよくあんたんとこ来てたじゃない。なんであんな残酷なことができるのかしら」

彼はこの「シュナイダー」という姓を聞き逃さなかった。聞くや否や、母親らのもとに走り、彼女らに詰め寄った。

「ねえ、シュナイダーさん!? シュナイダーさんがどうしたの、エリーゼは!？」

まさか盗み聞きされると思ってたのか母親のほうは呆気に取られていたようだったが、すぐにご近所がいかにも憎い、という体で答えてくれた。

「あら、ヘルゲちゃんあの日のこと知らないの? いきなりフランスの兵隊が炭鉱に攻めてきたのよ。シュナイダーさんたちも必死で抵抗したんだけどね……。鉄砲で殺されてしまったよ。一緒に来てた娘さんもとぼちり食らって……。ああ、フレンチ野郎は人間の血が通ってないケダモノなんだね! あたしやかわいそうでかわいそうで!」

魂が抜けたように呆然ぼうぜんと立ち尽くすヘルゲをよそにまくし立てるご近所を、母親が止めにかかる。

「ちよつと、小さい子ども相手にそんなこと吹き込むんじゃないよ!」

「なんでよ、これからのドイツを支える男じゃないの! しつ

かり奴らに報いてやるっていう気概をね……！」

「あんた、子どもに憎しみを植え付けるつもりかい！」

口論が展開されている間にも、彼の頭には混乱と焦燥がうねり渦巻いていた。エリーゼが死んだ？ もう二度と会えない？ もう二度とおしゃべりできない？ もう二度と遊べない？ 嘘だ、そんなの嘘に決まっている……！ 彼はやつのことで声を振り絞ってこう尋ねた。

「エリーゼ……エリーゼは死んじゃったの……？」

「そうよ、エリーゼちゃんはフレンチどもに殺されたのよ！」

彼はようやく理解した。もう未来永劫、彼女は自分の前に姿を現すことはない。絶望に染め上げられた思考がまとまるとき、彼の身体はあの物置部屋に向かって走り出していた。

「ヘルゲ、あんたもさつさとあっち行きなさいな！」という母親の声も、「ヘルゲちゃん、大きくなったら、いつかきつとあの子の仇を取るのよ！」という近所の声も、もはや彼の耳には入らない。ただただ逃げ込める場所を求めて走っていた。部屋に転がり込むと鍵をかけ、ひたすらに泣いた。

「おい、なにいつまでも赤ん坊みたいに泣いてるんだよ」という兄弟の心無い罵声や、「エリーゼちゃんのことば残念だけどね、フランスに仕返してやるうなんて思わないことよ。ほら、『右の頬を打たれたら左の頬を……』っていうじゃない」という母親のどこか見当違いな説教、「ドイツ男子がなに泣い

てやがる、悔しかったら泣き止んで出てきやがれ」という父親の厳しい叱咤が閉ざされた扉の向こうから聞こえてくるが、彼は全く意に介さない。ただ、泣きに泣いていた。

エリーゼの死を知ってから、ヘルゲの世界は狭く薄汚れた厨房裏の部屋に後戻りしてしまった。しかし、その内部の生活は一変する。趣味だった読書も絵も打ち捨て、ひたすら勉学に励んだ。ラテン語を学び、神学を学び、法を学んだ。戦後不況の煽り^{おほ}で苦しい生活になろうとも、その努力を緩めようとはしなかった。様々な書物を取り揃えるために他人に頭を下げたのは数知れず。金になることなら、どんな苦勞でも受け入れた。こうして、ギムナジウムを卒業するころには、かつての病弱少年は町一番の名士に生まれ変わっていた。

「あの弱虫ヘルゲが、立派になって」「あの子の分まで頑張っているのね」素朴で純粹な町の人々は、彼のことを友の死をばねに努力を極める模範人として温かく見守り、可能なことなら何でも協力した。誰も、彼の真意を知らなかったのだ。彼が目指したのは、「力によるヨーロッパ制覇」であった。ドイツが強ければ、ドイツが負けなければ、こんなにづらい思いはせずに済んだはずだ。自分のように悲しい思いをするドイツ人がこれ以上出ないようにするにはそうするしかない。無論、その計画開始の暁^{あけ}には、まずフランスを血祭りにあげてくれる。これが、今は亡きエリーゼの無念を晴らし、自

分が舐めた辛酸を決済する第一歩であるのだから。

この夢を叶えるためには、政治家、それも軍隊をアゴで使える大政治家でないとならない。自分のような思いを抱えているドイツ人は他にもいるだろう。仲間と手を組み、いつか必ずこの理想を現実に変えてみせる……！これが彼を突き動かした唯一の思想であった。全てはエリーゼと、彼女と過ごした日々のために。彼がああ抱いていた淡くぼやけた感情は、いつしか激しく鋭い別の感情に飲み込まれていた。

一九三三年、アドルフ・ヒトラー率いるナチスが独裁を確立すると、やがてその噂はヘルゲの耳にも入ることとなった。再びドイツを強国にするとうそぶく彼らを知って、これだ、彼らこそが我が仲間だと確信する。その翌年の春、地元の人々から惜しまれつつ、彼は単身ミュンヘンへ旅立った。誰にも劣らぬナチスへの忠誠と、容赦ない反ナチ分子の弾圧が評価され、平党员から親衛隊少佐へ、彼は異例の出世街道を駆け上がっていく。とりわけ、中尉から少佐時代に務めた占領下フランスの治安維持任務では、同じナチ党员ですら震え上がるほどの無慈悲さをみせていた。何も知らない部下からは「何かに取り憑かれているのでは」と陰口されることもあったが、彼には当然のことだった。あの日、フランスはエリーゼに情けをかけなかった。ならば、こちらが情けをかけてやる道理などどこにあるか。罪悪感などひとかけらもなかつ

た。むしろ、こちらに盾突いたレジスタンスを処刑するときなど、精神的なエクスタシーを感じるほどであった。これまた一つ、彼女の魂を苦しめるくびきを打ち砕けた、と。

過ぎし日々を思い出し、眠れるエリサをそっと見つめる。思えば、エリーゼを亡くしてから、ずっと彼女の幻影を追いかけるような人生だった。しかし、エリーゼよ。天が定めた運命の巡りあわせだろうか、あるいはあの狂気の年月を終わらせようという神の意志か。君はこうして再びここに舞い降りてきてくれた。もう、二度と君を失いたくない。今度こそ、君を守り抜こう……。優しく柔らかな灯に照らされながら、ヘルゲはそう誓った。

古ぼけた拳銃と、それを無言で磨く男がひとり。針で刺すような緊張感と、鉛のような重苦しさが同居した静寂が周りを支配している。

つい一週間前、アブラムはB州郊外のあるスラム街に出入りする怪しい外国人がいるという情報を手に入れた。いつもならばどうせ麻薬か何かの取引だろう、と切り捨てるところだが、今回は状況が状況だ。可能性のあるものは全て当たっ

ていくことにした。さっそくそこに出向き、スラムの首領という男に顔写真を見せると、

「ああ、これはいつも俺らから色々買ってくれる旦那じゃないですか」

とあっけなく白状した。どうやら、奴の素性を知らないらしい。しかも彼のことを知り合いだと勘違いしたのか、「最近旦那の機嫌がよさそうな気がする」だの「ぜひあんたからも一言札を言ってくれ」だの抜かしている。湧き上がってくる憤怒に震えつつも、何とか表情を取り繕って答えた。

「ああ、そう伝えておく」

この銃弾と一緒に、と心中で呟きながら。

それから目標の居場所が割れるまでは早かった。そのスラム周辺を四日ほど張っていると、あの首領の男が言っていた通り、夕方に奴が現れた。大きな荷物を抱えて歩く姿に、今すぐ撃ち殺してしまいたい衝動に駆られ、それでは以前の失敗の二の舞だぞと言いつつ聞かせるといふ葛藤に悩まされながらも何とか潜伏先までの尾行は成功した。

チェックメイトだ。完全に奴を追い詰めた。あとはこの「キュロス作戦」の総仕上げ——ヘルゲ・シュヴェルツマンの暗殺を遂行するだけ……。明日、その命を奪いに行く。

陽が傾き、落ちていく。蓋し、一日の太陽で夕日が最も色濃く鮮やかだというのは、事切れる間際の蝟燭が一番激しく燃えるというのと似ている。深紅の光を浴びながら、アブラムは一步、また一步と踏みしめるように歩みを進めていく。もう後には引けない。生きるか死ぬか、名誉を回復するか汚名を背負うか。全てはこのときにかかっている。

やがて、彼の視界に半分朽ちたようなアパートが現れた。ここだ。この二階の一室が目標の根城だ。ナイフを手に、姿勢を低くして階段を駆け上がり、扉の前に立つ。この鉄板一枚隔てた先に奴がいる……。ついにこれを使うときが来た。

彼はナガン M1895 を腰から引き抜いた。弾丸は七発、しっかりと込められている。菓室、銃身内部ともに丹念に清掃した。これで不慮の事態はないだろう。じつと銃を見つめながら、専用消音器を取り付ける。全ては整った。あとは自分の意思、ナチの息の根を止めるという確固たる意志だけだ。彼方から見守っていてくれ、我が娘エリサベトと元持ち主の将校よ。

扉の鍵に二発撃ち込む。古いからだろう、簡単に鍵は壊れた。もう目標を守るものは何もない。アブラムは中に素早く足を踏み入れ、索敵を開始した。部屋を仕切る戸のガラス部分に背の高い人影が映っている。間違いない、これが奴だ。銃把

を握る力がますます強くなつていくのを感じながら、引き金に指をかける。狙いを澄まして、彼は人差し指を曲げた。ガシャン、とガラスが割れる音とともに、鮮血が残りのガラスを一瞬にして真っ赤に染め上げる。

ヘルゲは突然襲い掛かった激痛を感じながら、力なく倒れ伏した。床に這いつくばりながら、虚空を掴む。なぜ、なぜ俺は倒れているんだ。こんなところで倒れてはいけないのに。立ち上がらないといけないのに。まだやり残したことがたくさんあるのに。エリサを守らなければいけないのに。それなのに、どうしても力が出ない……。胸からとめどなく血があふれては失われていく。さながら、思い描いていた夢と希望が消えていくように。幻影だろうか、彼が最期に見たのは、おぼろげに映るあの日々のエリーゼの姿。彼の視界は次第に色あせ、ついには暗闇へと消えていった。

……任務完了。銃口から上がる煙を脇目に、アブラムは眩

いた。

目標の死亡を確認するため、彼は戸を開けようとした。そのとき、突然悲鳴と喚き声が耳に入ってきた。何事だ、奴はひとり潜伏していたはずだ。彼は戸を開け放つと、そこにあったのは目標の死体と、それにすがり付いて泣き叫ぶ少女の姿だった。この少女、どこかで見た覚えがある……。なぜこんなところに……。？ 予想外の光景に唾然あぜんとしてみると、少女がこちらを向いた。彼はとっさに背後に銃を隠したが、遅かった。少女に銃を見られた、それもまだ煙を上げている銃を。彼女はキツと彼を睨み付けた。

「あなたがパパを殺したのね！」

パパ？ 奴が？ 一体何がどうなっているんだ……？

「いや、お嬢さん、奴は君のパパなんかじゃない。奴は大罪を犯した悪人で」

「黙ってよ！ あなたがパパを殺した理由なんて聞いてない！」

彼女は金切り声を張り上げて彼の話の話を遮った。

「エリサの大切なたった一人のパパだったのに……！ ねえ、パパを返してよ！」

聞く耳持たずという様子の少女を、彼は必死に説得しようとする。

「聞いてくれ、奴は死に値するようなことを繰り返してきたんだ、おじさんはそいつに罰を……」

「うるさい！ あんたなんか……」

彼女は憤怒と憎悪に満ちあふれた眼差しを彼に向けて、言い放った。

「あんたなんか……ただの人殺しよ！」

少女の言葉がえぐるように胸に突き刺さる。人殺し……？ 違う……そんなはずがない、自分はただ正義を行っただけ……これは悪を罰しただけ……。必死にその言葉を拒絶しようとするのと裏腹に、あの日の記憶が抑圧し続けてきた潜在意識から顕在意識へと堰を切ったようになだれ込んでいく。

……十五年前、アブラムは占領下フランスでレジスタンスらとともに反ナチ活動をしていた。迫害され、行き場を失ったマラッド一家を匿い保護してくれたレジスタンスへの忠誠心は強く、彼自身もまたその一員として抵抗運動の最前線で戦っていたのだ。そんなある日、突如アジトがナチスに襲撃される。何人かの犠牲を出しつつも彼とその家族、レジスタンスの幹部はどうか逃げ切るが、その後始まったのは仲間の追悼ではなくスパイ探しだった。このレジスタンスの指導者であるジャンの新たなアジトでの第一声はこうだった。

「……ここにはナチの犬がいる。同志諸君に聞こう、我らの掟は何だ？」

皆が声をそろえて叫んだ。

「レジスタンスに栄光を！ 裏切り者に死を！」

周囲は尋常ならざる熱気に包まれていた。存在するかどうかも不確かなスパイに対する殺意、それだけが支配していた。

次の日から、メンバーによる相互監視の生活が始まった。

些細な言動、仕草に至るまで、あらゆる行為がスパイ認定の材料になりかねない。全員が疑いの眼を互いに向けあうという、異常な日常が過ぎていった。

そして、事件から一週間後、あるメンバーに嫌疑がかけられた。元ドイツ共産党員であるというその青年が容疑者となったのは、他メンバーとの口論の際にドイツ語が出たという理由からだった。

「いい加減吐いたらどうだ……。苦痛が長引くだけだぞ」

その青年は椅子に縛り付けられ、皆の前で自白を強要されていた。角材で殴打されながらも、しかし彼は「俺はやっていない」とあくまで認めようとはしない。「裁判」は二時間以上にも及び、いよいよ容疑者が生死の境をさまようところまで来てしまっていた。

「なかなか口を割らない奴だ」

「どうする？ このまま殺してしまうか」

幹部らが気絶した青年に冷水を浴びせながらそう話し合っている中、突然アブラムの妻が大声を上げた。

「待ってください、その人は何も悪くありません！」

「何だって……？」

困惑するアブラムを尻目に、妻とジャンのやり取りが続く。

「……おい、貴様何と言った」

「彼は悪くないんです！」

「貴様、我らの決定に盾突く気か？ それとも、この小汚い

裏切り者に情でも湧いたのか？」

彼女は、耐えかねたようにこう叫んだ。

「違います！ 裏切り者は私なんです……！！」

そして、語り始めた。

あの事件の前、彼女と娘は路地を歩いているときに、運悪くパトロール中の親衛隊に捕えられた。そして、こう告げられた。

「本来なら即刻収容所行きだが……。俺にも情がある。お前の仲間の居場所を教えれば、お前と娘の命は助けてやろう。ただし嘘をついてみる、このガキは『シャワー室』行きだ」

仲間とはいえ、他人の情報と愛する娘の命……。選択肢などなかった。アジトの場所をバラし、彼女と娘は解放されたが、後日ナチの襲撃事件が起きたのだ。

「だから私が悪いんです。でも信じてください、私はただ娘を助けたかったんです！ 私はどうなっても構いません、どうか娘の命だけは……！！」

泣きながら懇願する母親を、娘エリサベトは不安げに見上げていた。

「ほう……我らの正義よりもそのガキと我が身のほうが大事というわけか」

ジャンは軽蔑の眼で彼女を一瞥した。そして言葉を失っているアブラムのほうを向いて、こう言った。

「……だそうだ。まさかとは思おうが、この裏切り行為に貴様の関与はないな？」

呆然としながら、彼はただただ首をこくこくと振った。すると、ジャンは彼に拳銃をよこした。

「ならば、それを証明しろ。貴様の手で、この裏切り者を処刑せよ」

夫として、娘と妻を守らなければならない。しかし、ナチに抵抗するには、レジスタンスに参加しなければ……。揺れる心でジャンと銃を交互に見るしかなかった。周囲の人々は、「裏切り者を殺せ！」と口々に叫んでいる。彼はどうすることもできなかった。

「アブラム！」

石のように固まっている彼に、妻の呼び声が聞こえた。

「私たちの娘を……エリサベトを頼みましたよ」

彼女は涙をたたえながら微笑ほほえんでいる。

彼は決断した。妻に歩み寄り、頭に銃口を押し当て、撃ち抜いた。

「死んだか」

ジャンの声がする。

「皆も見ただろう、これが裏切り者の末路だ！」

「レジスタンスに栄光を！ 裏切り者に死を！」

アジトに歓声が響き渡る。裏切り者の血を見て、レジスタンスのメンバーたちはある種の興奮状態に陥っていた。アブラムとエリサベトからは完全に隔絶された空間で、指導者は雄弁をふるい始める。

「同志諸君、我ら戦士は何をもって強くなるか？ それは剣ではない、敵を殺すという意思だ！ 敵の血という戦利品だ！

この憎むべき敵の死をもってより強大になった我々は……！」

喧騒けんそうを打ち破るかのように、突如として銃声がこだまし、ジャンの頭が吹き飛んだ。

「見つけたぞ！ 今度こそ一人も生かすな！」

怒声がする方向へ向くと、武装した親衛隊がアジトに押し入っていた。あの狂騒で誰一人気付かなかったのだろう。

「ジャン！ しっかりしろ！」

「逃げる！ ナチが来やがった！」

「ああ……せめて命だけは……」

指導者を失ったレジスタンスたちは、先ほどまでの熱狂を崩されて散り散りになってしまった。微動だにしていないジャンの身体を抱きかかえる者、武器を取って抵抗する者、逃げ惑う者、必死に命乞いをする者……。彼らを、機械のようにナチは容赦なく射殺していった。

「エリサベト！ しっかりつかまっている！」

大混乱の中を、アブラムは娘とともに切り抜けていった。妻の死を喜ぶような連中に差し伸べる手などない。ただ、エリサベトを守らなければ。妻との約束を守らなければ……！ その一心で、血しぶきともみ合いの中をぐり抜け、何とか逃げ切った。

「エリサベト、大丈夫か……」

しかし、訪れるべき安堵はすぐに消え去った。娘は、腹部に被弾して息絶えだえになっっていた。

「お我がが神よ！ いるのなら答えてください、どうしてこんなことに……！」

彼は灰色の空に向かって絶叫した、その声が枯れるまで。

結局、エリサベトは三日後に死んだ。

「パパ……痛いよ……ねえ……なんでママいなくなっちゃったの……？」

こううわごとを呟きながら、彼女は死んでいった。

エリサベトの死後、彼は生ける屍のようにのらりくらりと毎日を過ごしていった。もう希望も何もない。残ったのは全てに対する失意と後悔だけ。ナチに抵抗するどころか、娘さえ守れなかった。俺がやったのは、ただの妻殺しだ。もう殺されてもいい、収容所にも送ってくれ……。現実に絶望し神を呪いながら、自堕落のままに生活していた。

そう暮らしているうちに、ドイツのフランス撤退、続いて戦争終結の報せが届いた。知人たちはナチどもを打ち負かした、自由を勝ち取ったと喜び勇んでいたが、彼の心はちっとも動かなかつた。ナチに勝ったところで、自分の罪が消えるだろうか。自由を取り戻したといつて、失われた我が娘が帰ってくるんでもいいのか。歓喜に沸く世界の片隅で、たったひとり取り残されているような孤独を味わう日々だった。

そんな彼だったが、近いうちにユダヤ人の独立国家ができること、そして各地に逃亡したドイツ戦犯を追及する諜報組織ができるらしいという噂を耳にする。これが彼の人生の大きな転換点となった。いいだろう。残された人生をかけて、この絶望、憤怒、失意……全てをもって奴らに代償を支払わせてやる。あらゆる過去を捨て、復讐のみに生きるのだ……。

こうして彼は転生を遂げた。自責と慚愧に満たされた痛ましき記憶を忘れ去り、復讐心ただそれだけに突き動かされるイスラエル陸軍中尉及びイスラエル諜報特務庁工作員として生まれ変わった。

だが、過去の完全なる抹消など人間には不可能だった。夜になれば、あの忘却の彼方に葬ったはずの記憶が時折蘇ってくる——抽象的な「夢」という形で。女を殺し、神を冒瀆し、ナチに引き裂かれる男。それは何であろう、他でもないアブラム・マラッドその人だったのだ。そして彼があゝの悪夢に抱き続けた恐怖、それは人ならざる復讐鬼に堕した自分自身を暴かれ自覚させられる恐怖、「真実への恐怖」だった。

「……そうだ、私はただの殺人者……後悔と失意にまみれた哀れな人間だ」

閉ざされたはずの精神の内側で、光のような速さで記憶が再生されていく。過去と現在とは統合され、心の均衡が崩れていく。いまや正気の仮面は引き剥がされた。あとはひたすら狂気の深淵に堕ちていくだけ……。彼は薄笑いを浮かべながら、銃を少女に向けた。

「妻を手にかけて……娘も失った。一体私に何が残されているというんだ？ もう何も失うものはない、もう何も怖くない

い……！」

彼女の存在を消すことで、元に戻れるかもしれない。わずかに残った知能がさらなる狂いの思考へと誘う。彼の銃はまさに火を吹こうとしていた。

雷のような轟音が響き渡る。それは彼の銃のものではなかった。引き金を押し込む一歩手前のところで、その意思は打ち破られた。彼の胸には大きな風穴が空き、血が噴き出している。発する言葉もなく、彼は床に崩れ落ちた。急速に薄れゆく意識の中で、少女の姿が娘の面影と重なった。

「エリサベト……？」

エリサベトよ、こんな私を迎えてくれるのかい……？ 娘の姿を目にして、最期に彼は正気を取り戻した。

「うん！ さあ、行こう、パパ……！」

彼女は温かく微笑んで手を差し伸べている。それに応えて、手を伸ばす。力の限り伸ばした手の指が、彼女の手に触れた——その瞬間、彼女の姿は霧もやのようにその形を失った。同時に、彼の灯もまたその光を失った。

「第一目標の死亡確認及びに第二目標の狙撃成功、本作戦の

達成を報告します」

ナチ残党潜伏先の対岸に位置する建物の屋上に、迷彩服に身を包んだ男が立っていた。彼は黒煙上がるライフルを小脇に抱え、無線を耳に当てている。

「そうか……よくやった。『パフレヴィー』、いやアブドウル・アーラフ君」

「それでは遺体処理班の出動と、一般人の保護を要請します」

十か月前、バージニア州ラングレーの中。中央情報局に一本の機密電話が届いた。

「こちら、アメリカ中央情報局本部です」

「こちら、イスラエル諜報特務局……そうです、モサドです。

今回は、あなたがたアメリカに依頼したいことがございまして」

電話の主はそう名乗ると、依頼内容を手短かに話し始めた。

「一つ、南米に逃亡したと思われる元ナチス少佐の暗殺。それから……」

「それから？」

CIA長官は、思わず耳を疑った。

「こちらの工作員……、いえ『元』工作員の抹消を願いたい」

後日、CIA本部にある工作員が呼び出された。

「アブドウル・マラーフ君だね」

重い扉を開けると、そこには彼の上司である作戦本部長と支部長がいた。本部長はいつも通り余裕の表情で深く腰掛けられているが、支部長はどこか神秘的な面持ちで立っている。先に本部長が口を開いた。

「君に任務を与える。今回は暗殺任務だ」

この本部長は、右も左も分からない移民である自分をCIA入局時から手取り足取り世話してくれた恩人だ。どんな任務であれ、ここで誠意を見せなければ。緊張でこわばっているアブドウルに、二枚の顔写真が見せられた。一人は血色の悪そうな白人、もう一人は彼と同じ浅黒い中東風の男だった。

「彼らは……?」

「第一目標ヘルゲ・シュヴェルツマン、元ナチス親衛隊少佐だ。そして第二目標が……」

上目遣いで、わずかな表情の変化を読み取るようにアーラの顔を覗き込みながら本部長が言った。

「アブラム・マラッド、イスラエル諜報特務庁——通称『モサド』の工作員だ」

その瞬間、アブドウルの眉間みけんがびくりと動いたのを、彼の上司は見逃さなかった。畳みかけるようにして、彼に問うた。

「アブドウル君……君はこの出身だったかな」

その問いに、ぼつりと呟くように言った。

「パレスチナ……エルサレムの外れの村です」

彼は、目頭が熱くなっていくのを感じずにはいられなかった。

彼はエルサレム近郊のデイル・ヤシーン村で産声を上げ、

そこで育った。彼の故郷が消えたのは、十七のときだった。

何も変わらない日常が過ぎていくと思われたその日、突然村の外から何十、何百人もの大声が轟とどろいた。

「シオンへ帰還せよ!」

「ユダヤか、死か!」

鬼気迫る怒声に怯えながら、窓から外の様子をうかがっていると、大勢の武装した男たちが村になだれ込んでくるのが見えた。勇敢にも農具で抵抗しようとした父親と仲間たちは、あつけなく銃弾に倒れた。彼らは小銃を乱れ撃ち、榴弾りゅうだんを投げ込み、火を放ち、破壊の限りを尽くした。愛着ある村が灰に帰すのに、一時間もかからなかった。

銃声と爆発音轟く灼熱の中を、彼は母親と妹を連れて逃げ出した。幸い脱出は成功したが、ごうごうと故郷から上がる炎を、隣町から指をくわえながら見つめているしかなかった。

その後、彼と家族は各地を放浪する難民となった。そして最後に辿り着いたのが、「移民の国」アメリカであった。

「……私は君が適任だと思うのだ。もう一度言おう。当任務、君にお願いしたい」

今度はまっすぐアブドウルを見つめながら、上司はそう言った。

「はい、今回の任務、引き受けさせていただきます……！」
母と妹を養っていくため、高給だからという理由で就いたCIAだったが、まさかこんな形で復讐の機会が巡ってくるとは。アブドウルはこみ上げてくる高揚感を抑えながら快諾した。

「そうか、よろしく頼むぞ」

南米に潜伏する第一目標を追跡しつつ、武器商人に偽装して第二目標と接触。そして、両者を同じタイピングで抹殺する。言い渡された作戦内容はこうだった。

「そして、これが今作戦の小道具だ」

一丁の古びた拳銃がデスクの上に置かれた。

「ナガン M1895だ。この古びた銃は大戦期にソ連で使用された、消音器付きの珍しい代物だが……。それは釣り餌に過ぎない。我々にとって重要なのは銃把だ。そこに小型の高性能

能発信機が埋め込まれている。これを第二目標に握らせよ」

その銃を彼に渡すと、さらにこう加えた。

「どうやら第二目標は第一目標の命を狙っているらしい。うまくやってくれ。では、幸運を祈る」

アブドウルが扉を閉め立ち去ると、支部長がおもむろに口にした。

「しかしモサドも何を考えているんですかね……身内の暗殺を依頼してくるなんて」

本部長は葉巻を取り出すと、先端にジッポーをくぐらせつつ答えた。

「……あちらによれば、『組織の意向に沿わず、暴走する工作員だから』だそうだが。まあ、他の目的があるだろうな」

「ほう。ではその真意とは？」

「第二目標はかつて、こちらの作戦を妨害した。君、『ペーパークリップ計画』を知っているかい？」

「さあ、なんででしょうな？ 新参の私にはさっぱり」

「そうか。では、話しておこう。古参の私からな」

そして、本部長は支部長に語り始めた。大戦末期から終戦後にかけて、「ペーパークリップ計画」というナチス戦犯をアメリカ陣営に引き入れる大掛かりな作戦があったということ

を。

「……そんな作戦があつたとは。しかし、それが今回の作戦とどういう関係が？」

「我々は、ラインハルト・ゲーレン少将ら数名の引き抜きに成功した。しかし、失敗もあつたんだ」

彼は煙を吐き出し、苦笑いした。

「ある将校の引き抜きを検討していた。だが、そいつをモサドが狙っていることを掴んでね……。あわてて彼らに圧力をかけたよ。それにも関わらず、あのモサド工作員は彼を殺害してしまった」

「なるほど、だからその失態の清算をするために」

「恐らく。アメリカの援助なくしてイスラエル建国は不可能だったし、これからもそうだ。ここで我々の機嫌を損ねるのはまずいからな」

「そういうことですか……」

支部長はそう言うのと黙りこくってしまった。

「支部長君」

本部長はすくっと立ち上がると、うつむく彼に葉巻を一本すすめながら話しかけた。

「人を最も駆り立てる感情は何だと思っね」

「……さあ、何でしょうね」

渡した葉巻に自慢のジッポで火をつけながら、さも自信ありげな感じで本部長は言った。

「それは、復讐心だ。これは私の持論だが……人が剣を取るのではなく、復讐が剣を取るのだ」

そしてこう続けた。

「しかし、真の強者は報復しない。その根拠は聖書にあるんだが、心当たりはないかね」

『剣によりて立つもの、剣によりて滅ぶ』……」

「そうだ。確か『マタイ福音書』だったか。だから我々は復讐しない。復讐を使役するんだ」

本部長は、支部長に寄り添うように葉巻をふかしながらそう言った。吐き出した煙は混ざりあい、部屋を満たしていった。

絡み合う復讐の輪廻は断ち切られた。

斜陽の空は、いつしか果てなき暗闇に変わっていた。

それでも明日になれば世界は再び明るく照らされるだろう。

だが、彼らの陽はもう永久に昇ることはない。彼らの正義、彼らの憎しみ、彼らの愛、彼らの悔い……全てを飲み込み無

に帰す永遠の夜闇よやみが舞い降りた。